

# 夏季及び梅雨季における台所の熱環境調査

佐藤篤史（郡山女大）

**目的** 近年は冷房機器の普及により、夏季の住宅内環境は快適になっているが、家庭の労働空間である台所については、主婦などが多くの時間を費やす場所にもかかわらず、火気を使用することもあり、未だ熱環境的には十分であるとはいえない。そこで、台所熱環境の実測調査を行うことにより、現状を把握し、問題点を明らかにすることを目的とする。

**方法** 1999年の梅雨季および夏季に、データロガーを使用し、台所数ヶ所の温湿度を一週間程度自動記録し、その間の居住者の台所の滞在時間、調理機器の使用状況を記録用紙に記入させた。対象とした住宅は3世代が同居する木造住宅、核家族の木造パネル住宅および独り暮らしの木造アパートである。

**結果** 各住宅とも台所で冷房器具を使用している例はなく、このため調理を行っていない時間帯は、室温は外気に影響を受けて変動している。調理時にはガスコンロの近辺で温度上昇がみられたが、特に3世代家族の場合は調理に要する時間が多く、またその量も多いため温度上昇が顕著に現れた。特にコンロ付近の垂直温度分布は、120cmを越えると高くなり、天井付近では50℃近くになることもあった。相対湿度については、梅雨季・夏季ともに各住宅とも調理時の上昇はみられなかった。この時期の調理内容は、焼く・炒めることが多く水蒸気の発生が少ないことも理由の一つと考えられるが、一度、換気扇をつけずに調理を行った日があり、この場合は居間と比較して約20%の相対湿度の上昇がみられた。換気扇による水蒸気の処理はどの住宅でも機能しているようであるが、熱の処理は十分ではないようであり、調理時については不満を訴える家庭もみられた。